

『現在、リハビリ中』

作者 浅羽一

肩まであった髪をばっさりと切ったのは、「頭でも丸めて心機一転、頑張ろう」なんて殊勝な考えを抱いたからではまるでなく、ただ単にインターネットで〈女子に一番モテる髪型は黒髪短髪〉と言う記事を見たからと、それからまたまたその数日後に寄ったホームセンターで日本製のバリカンが、しかも掃除機よろしく吸い込み機能を内蔵された優れものが安売りされていたからだ。ある程度の範囲で髪の長さを自由に調節出来る上に、長く使っても錆びにくい刃を使っている、なんと驚き六千円。

見た瞬間、これだ、と思った。

恥ずかしながら生まれてこの方ただの一度も髪を染めたりパーマを当てたりした経験がなければそもそも美容室なるものにお世話になったことのない身なので浅薄な知識で申し訳ないが、噂によると理髪店と違ってあそこは髪をちよつと切るだけでも数千円から高い所では一万円以上も掛かるらしい。となると、このバリカンを使っていわゆる「モテる髪型」にすれば、多くともほんの数回で十分に元が取れる計算になる。素晴らしきかな文明の利器。誇らしきかなめいどいんじやばん。家へと向かう車の中で気分はさしずめ、男性化粧品のみなどで呆れるほどのモテっふりを見せるハリウッド俳優と化していた。

おいおいこれで俺も遂に彼女持ちか。それどころかいよいよ人生初のモテ期突入か。かつて異国の天才画家は愛人二人を目の前で争わせてその様子を画に描いていたというけれど、俺ならそんな薄情な真似はせず、「まあまあ俺の為に喧嘩すんなよ。俺はどっちも愛しているからさ」とかなんとか愛情たっぷり論しながら二人まとめて抱き締めてやるのに、なんて妄想も或いは現実になる可能性だって…。

家に着いた頃には最早、頭の中のみならず車を操る行動だってあたかもジゴロ。車庫入りの為に車をバックさせた時なんて、無人の助手席に必要以上に大きく左手を回し、アクセルの踏み込みだっっていうも以上に深め深め。勢いよく響くエンジン音にさらに気分を盛り上げられつつ、結局はクラッチペダルの操作が慎重なので掛かる時間はいつもとさして変わらないなんて事実は綺麗さっぱり意識から消えていた。

逸る気持ちを抑えに抑え、とりあえず夕飯の支度をする。勿論、気分は相変わらずだから、むしろ普段以上に手の込んだ料理を作ってしまった、何やかんやで気付けば時刻はすでに深夜0時。だけどそんなことは関係ない。実際、皿を洗っている時からすでに上半身は裸だった。腹に洗剤の泡や水が飛ぶたびに、無駄に腹筋を動かしてついでに大胸筋を震わせた。

そうして遂に、その時が来た。

洗面所の足下に申し訳程度の範囲でビニール袋を切って作ったシートを敷き、それが終わったらずボンを脱ぎ、靴下は丸めて洗濯機の中へダンクシュート、当然ながら上半身は裸のままだ。だって切った髪の毛はバリカンが全て吸い込んでくれるはずなのだから。

鏡の前に立ち、髪を束ねていたゴムを外す。途端に毛根の数そのままの黒髪がわさっと落ちて、先端がくるんと綺麗な外はねを自然に生んだ。

正直に言うと、その時になって少なからず気持ちに変化が生じたのは本当だ。ただし、それは決して後悔や躊躇ではなかった。それは言うなれば、今まさに嫁に行こうとする娘を見送る父親の心境、或いは、争いが終わり共に助け合ってきた仲間と戦場で過ごす最後の夜のようなものだ。お洒落目的でなく無精が原因の長髪は端的に言ってマイナス評価の方が多めだったけれど、こうしていざ別れるとなるとやはり感慨深いものがあつた。「分

かっけてくれ。これも全て明るい未来の為なんだ」。意を決して鏡の中へそう言うのと、そいつは確かに笑っていた。

スイッチを入れると、なるほど掃除機めいた音が鳴り響き、長さ調節の為に付けられた先端のアタッチメントの下で銀色の刃が高速で動き出した。こそそとやるよりも、やるならいっそ思い切りやろう。鋏や櫛なんて軟弱なものに用はない。アタッチメントの設定を4センチに固定して、俺は堂々と額の中心へ先端を触れさせた。頭蓋骨に伝わるバリカンの震動が胸の鼓動をいや増した。

果たして、数秒後には海を割ったモーセのごとき光景が鏡の前に現れている、はずだった。少なくとも自分では本気でそう信じていた。結論を言えば、景気よくジョリツと鳴ったのは最初の数ミリだけだった。

恥ずかしながら義務教育を終えて以来、床屋にすら行かずいつも自分で散髪をしてきた身では知る由もなかったのだが、どうやらバリカンというものは大量の長髪を刈る用には出来ていなかったらしい。ノコギリじみたギザギザの刃がまるで見えなくらい、がっちり髪と髪の間が絡まり、内臓モーターは全く真価を発揮出来ない現状に不満の声を上げていた。ついでに俺も思わず声を上げた。ずいぶんと昔、子供の喧嘩で前髪を思い切り掴まれた時のことを思い出した。

いやいやいやいや待って待って待って、と声に出しながらバリカンの電源を切った。手を放してもバリカンは豪快な髪飾りさながらにぶら下がったままで、当初の予想とはかけ離れていたものの、それはそれで痛みも忘れて感心してしまうほどだった。

仕方なく二分ほど掛けてバリカンを髪から外し改めて刃を額に当てたが、その頃にはもう最初の勢いは七割ほどまで減っていた。だが、すでに額の真ん中に荒々しい爪痕は刻まれている、もう先に進むしか道はなかった。ちなみに、長すぎる髪はバリカンの本体に空いた吸い込み口から余裕ではみ出していて、期待していた機能はまるで発揮されていないかった。

とは言え、それからは初見の玩具を前にした猫のような動きでバリカンを操った結果、相変わらず吸い込み機能こそ満足に働いていなかったものの、あれほど長かった髪はばさりばさりと見事に足下へ積まれていった。残った髪の長さが本当に4センチであったのかは疑わしいが、そんな細かい話はいつしか短時間で変化していく外見を前にどうでも良くなっていた。

およそ十分後。おそらくバリカンを手にしたことのある人間ならば一度は試した経験があるだろう。右半分は元のまま、左半分がまさに短髪、それで交互に回れ右と回れ左を鏡の前で繰り返し返す。ついでに正面を向いて携帯電話で写真も撮る。さらにはその画像の右半分、左半分に順に指で隠してけらけらと笑う。：きつと、真におかしくなり始めたのはこの辺りからだった。

とりあえず同じ時間を掛けて右半分も4センチの長さに散髪して、本来であれば後はそこから説明書にあったように全体のバランスを見ながら少しずつ側頭部や襟足の長さを調整していく、べきだったのだが、この時の俺の内心は「あれ、俺ってもしかして、短髪も似合うんじゃないね（軽薄な男風に）」。

アタッチメントの設定を3センチに変えて、ジャリジャリジャリツ。

今度こそ期待通りの音が響き、バリカン内部にはあつという間に髪が溜まっていく。そ

うして鏡を見れば、まだまだ全然ふっさふさ。脳内では短髪黒髪の人気俳優の顔が次々と流れていき、気付けばアタッチメントを再々調整。

我に返ったのは、9ミリに設定したバリカンの通った跡がそれまでの黒から明らかに肌色じみたもの変わった時だった。焼き畑農業の畑を区切る農道のように、そこには綺麗な道が出来上がっていた。言うまでもないが、凹の字をそのまま現したかのごとき現実を前にして、俺にはもうその道を進むことしか出来なかった。

右耳の付け根の少し上、自分の頭皮にわりと大きな黒子があると知ったのは物心付いてから初めてのことだった。

肩から胸に掛けて1センチから5ミリ程度の細かい髪が無数に張り付いていた。それらが全て元々は頭の上にあっただと考えれば、なるほど吸い込み機能はそれでも十分に働いているのだろう。ステンレス製の刃は小気味いい音を少しも濁らせることなく、むしろ残りの髪が短くなるにつれ切れ味を増している感さえあった。だからこそ、唯一と言わべき問題は、そんな事態になっても尚、「まあ、よく見れば、これはこれで似合っているかも」なんて風に考えた深夜三時の脳みそだった。

そうやってしまえば最早、テクニックなど要らなかった。セルフカットと言えば鋏ばかりのバリカン童貞だろうが美容師任せの素人童貞だろうがごりごりの野球部所属だろうが関係ない、とにかく全てが均一になるように、後はひたすら音がしなくなるまでバリカンの刃を往復させ続けるだけだった。

やがて体にまとわりついた髪を洗い流し、文字通り頭を洗い終えた時、窓の向こうは新しい朝を迎えていた。頭をさするたびに鳴る音が青空に相応しく軽快だった。

何はともあれ、結果として文句の付けようがないほどの「黒髪短髪」が出来上がった。だから俺は満足していた。そしてそれはしばらく眠ってやがて起きてから改めて鏡を見た時も変わらなかった。いや、いつそ今まで感じたことのない清々しさが余計に新鮮で楽しかった。

ああ、ようやく変わった、そう思った。

きつとこれまでの自分は喻えるなら古くさい文房具の鋏を手にもてない道を邁進していたドン・キホーテみたいなものだった。だけど遂に、文明の利器という剣を手にした騎士は新しい道へと進路変更出来たのだ。そうなればもう、物語の展開として残すは美しいお姫様との出会いしかない。

外に出ると、日差しが直に頭皮を刺激した。人に会うと、皆が自分を見てる気がした。職場に行くと、同僚が俺を取り囲んだ。

「おい、どうしたんだよ急に」

そんな質問が男性陣から飛んできて、そいつらはみんな芸能人を意識したような髪型や髪色をしていて、俺は何だか優越感めいた気分すら抱いて冗談交じりに「いや〜。女子に一番モテる髪型は黒髪短髪だって聞いたからさ」なんて軽口を女性陣へ向かって―。

「でも短髪と坊主って違うよね」

「まあロン毛よりは良いけどさあ」

「あ〜。私、坊主NGです〜」

変に気取った風でもわざとからかっている風でもなく、ごくごく自然に語る女性陣の言葉に遅まきながらようやく悟る。

なるほど、どうやら自分は方向音痴なのだろう、と。

内心密かに期待していた「ちよつと触らせてよ」なんて黄色い声は一向に聞こえてくる気配もなく。ようやくあつても年配のおばちゃんからの一度きりで。

携帯電話に残っている髪在りし頃の画像を日付順に眺めながらぼんやりと思う。残念ながら、人生初のモテ期はまだまだずいぶん先のことらしい。

〈了〉